

2020年度

特別選抜Ⅲ アジア事情探究型（自己推薦入試）

適性検査

一 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

先日、中国人の知人たちとの会食の機会があった。映画製作会社プロデューサー、女優、旅行会社幹部、貿易会社経営者、インターネットスクール経営者とさまざまな業界の人間が一堂に会したのだが、全員、「政策の影響が大きすぎる」とため息をついていた。突然の税制の変化や輸出入の総量規制など、通達のために経営計画が狂う。業界が違うのに、その1点においてでは全員深い共感を抱いているのがなんだかおかしくもあり、恐ろしくもあり、の一夜だった。

私は北京で民間出版プロダクションと協働しつつ、日本語の(a)ホンヤク本の編集を手がけたり、日本文化関係のオリジナル書籍を制作したりしているが、深いため息をつく思いは一緒だ。出版界にも今は政策の激震が(b)オソっており、書籍発行点数の制限、審査強化の影響にあえぐ日々だ。

今や審査は文章のみならずデザイン方面にも及ぶ。特に英語を用いたデザインに対して、審査担当者から変更が要求されるようになってきている。

例えば、この(c)レンサイの右肩に入っているコラムタイトルの「China Scope」という英語。中国語の誌面でも、同じようにページの飾りに英語を使うことがあるのだが、それに対して出版社の審査部門から「なぜ、英語でなければならないのか？」と突っ込みがあり、最終的には多くの場合、涙をのんで使用をあきらめることになる。

ただ、この「なぜ英語でなければならないのか？」のやりとりは、案外、(1)自分の言語感覚を見直す貴重な体験になっている。

英語を使うのは、なぜ、なのだろうか？

一つには、A な変化、ということがある。

直線で画数の多い中国語に対し、アルファベットは曲線が多く、画数が少なく、漢字ばかりの誌面に少し加えると、見た目に柔らかみが生まれる。

また一つの単語が長いので、デザインの变化をつけやすい。例えばこれまでよく行われていた例で、「目次」を「Contents」と表記して、そのあとに内容を中国語で(d)レッキョとしていくデザイン。Contentsならアルファベット8文字で長く目立ちやすいが、中国語の「目録」だと2文字。中国語は基本的には一単語が短く長さがほぼ同じなので、メリハリをつけたい箇所には英語を使いたくなるのである。

それに加えて、私のなかに、英語をいれたほうがなんとなく「洗練されてみえる」「先端的にみえる」という意識があることも否めないだろう。

日本語の媒体のなかにも英語があふれている日本で育ち、自然に身につけてしまったこの言語感覚をいま中国で徹底的に問い直されているところなのである。

涙をのみつつ、さまざまな英語を誌面から削っていく。

最近、自分で編み出したのは、中国語をピンインのアルファベットにし、それをデザインに使う、という技。中国語でもピンイン表記にするとさまざまな長さや曲線が生まれるので、それを用いて **A** 変化をつけ、なんとか乗り切ったりしている。

こうして、そこに明らかな存在理由がなければ、誌面のなかの英語は徹底して排除されていく。小さな誌面であっても、そこで繰り返される **B** 「**B**」の一シーンに立ち会っているような思いもする。

最近ほどの媒体をみても、まず英語と中国語のバランスが気になる。(2) **もつとも** 審査基準の厳しい中国語の書籍からは、**「デザイン英語」**は激減した。月刊誌や週刊誌にはまだ残るが、「**デザイン英語**」どころか本文も英語だらけだったかつ

ての誌面がうそのように、中国語の比率がかなり高まっている。ネット媒体にはまだ英語が目立つがこちらも全体に一時期よりかなり控え目になっている印象だ。街頭の広告コピーは、ブランド名は、店頭の看板は……？と、どこにいても英語と中国語の「B」が気にならずにいられない。

そうこうするうち、北京の幹線道路沿いで、「写好中国字、做好中国人」という公共広告看板に(e)ソウグウ。いまはそういう波が来ているのだと自分に言い聞かせている。

この「B」ならぬ「文字の衝突」はこれからどうなっていくのだろう。

英語があふれる日本語媒体で育った私はなんとなく英語に対し良い印象をもつ言語感覚を養われてしまったのだが、中国の次世代はこの状況下で、どんな言語感覚、文字感覚を持つようになるのだろうか。

(原口純子「China Scope 気になる言語感覚の行方」による)

(注)「写好中国字、做好中国人」：中国語で、「中国の文字をきちんと書けるようになって、(立派な)中国人になる」という意味。

問3 空欄Aには同じ語が入る。空欄Aを補うのに最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。(配点5点)

- ① 立体的
- ② 視覚的
- ③ 絵画的
- ④ 意識的
- ⑤ 言語的

問4 傍線部(2)「もつとも」とあるが、その意味として適切なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 当然
- ② 少しも
- ③ ただし
- ④ いちばん

(配点4点)

問5 傍線部(3)『デザイン英語』とあるが、それはどのような意味か。同じ意味の語句を文中から一五字以内で抜き出しなさい。

(配点6点)

問6 空欄Bには同じ語が入る。空欄Bを補うのに最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。(配点5点)

- ① 文飾の衝突
- ② 文明の衝突
- ③ 文字の政策
- ④ 文字の相違
- ⑤ 文字の違和感

二

次の文章を読んで、後の問い（問158）に答えなさい。

儒教にいつもつきまとう疑問は、「教」とつく名称から、それが宗教であるかどうかである。肯定的な意見もあれば否定的な見解もあり、実情としては、よくわからない、というほかはない。

ただ、(1) 儒教は神のような存在を欠落させている。 いわゆる世界宗教Ⅱ「普遍」とみなす立場からみれば、宗教・信仰・帰依などとはいいがたい。筆者も否定的に傾いている。宗教というよりは、学術あるいは教理といったほうが、よりふさわしい。

といっても、それも宗教や学術ということばの意味内容に左右される。そんな定義や議論は、さしあたりここでは問題にならない。ともかく、宗教かどうか判別しづらい儒教の具体的な特徴は、知っておく必要がある。

近現代のあらゆる教理・学術は、もともと(b) 呪術的・神秘的・宗教的な文章・儀礼をいわば世俗化、合理化して、人間世界にひきもどしたものにほかならない。 原始儒教もおそらくそうだったのであろう。孔子が「怪力乱神を語らず」というとおりである。人間社会の現実在即していたのが、儒教最大の特徴にはかならない。

その意味で、二千五百年も前にできた儒教は、その教義をみるかぎり、現在のわれわれでも驚くほど、奇怪・意外などの少ないものであり、ここに特徴もあれば、問題もある。

儒教にはおよそ超越的なところがない。極端には走らない「中庸」が、その最大の徳目である。ほどほどが最善だというわけである。

比較してみると、わかりやすい。

A

キリスト教は神と悪魔の二元論であり、対極にもものみる、また神秘・奇蹟を強く信じるがゆえに、現実・常識にも強い疑いの感覚をとまなう。あたりまえを疑うことこそ、

科学の第一歩にほかならない。

儒教は中庸を尊び、神秘は論外。合理的なのがあたりまえであるから、それ以上の合理主義が育たない。現実の追究は一定の程度までくれば、常識的な教義に還元できるから、その理論で納得できれば、それ以上の好奇心・探求心がわかない。つきつめた分析も放棄してしまう。

現実・常識に対する疑いが薄いので、それが逆に、常識的な教義に対する思い入れ、固執を激しくする。さらにはその教義じたいを、かえって転変たえない現実から遊離させてしまう。まさに B といってよい。

(中略)

儒教の立場は、自分本位である。自分という存在をまず尊重し、そのうえで、他人との関係におよぶ。私が優先し、しかるのち公に尽くす。儒教の経典『大学』にいう「修身・齐家・治国・平天下」という有名なフレーズからも、そのコンセプトはよくわかるだろう。「天下」よりも、まずわが「身」なのである。

これまた人情からして、ごく常識的な教理である。人間も生物である以上、まず自身の生存のことを考える。他人のこと、人とのつきあいは、それからである。「衣食足りて礼節を知る」。自分の衣食も乏しいのに、他人への礼節などかまっていられない、というのは、あたりまえといえ、あたりまえである。

そして自分を優先するところから、自尊と謙譲の精神が出てくる。相手に対する謙譲とは、自己の尊重を裏返したものにほかならない。自尊・自信のない謙譲は、単なる卑屈、(c) 隷従である。

そうした心の動きを可視化した所作として、礼儀がある。たとえば、相手に敬意を示すには、高いところからへり下る。頭を下げる、おじぎをする、などの行為は、その典型であって、まず自分が高いのが、前提なのである。

自尊・自分本位というのは、自己中心主義と紙一重である。わがまま・独善に陥り、私利私欲の肯定・放置にもつながりかねない。こうした事情は、諸子百家で儒教と鋭く対立した墨子の教理をみれば、いつそう意義がよくわかる。

儒教は要するに自己中心的、利己的であるから、社会全体にとって害悪になりかねない。これが墨子の立場であり、批判である。そんな自尊優先に反撥して、墨子はまず自己以上に他人のことを考え、他人に奉仕する献身、「兼愛」「無私」をとなえた。こうした姿勢が魅力的に映って、実践したくなるのは、ボランテアが称えられる現代社会でも同じだろう。

しかしあまりに「無私」、献身が過ぎては、他人はよくても、自分が壊れてしまう。そこで孟子が時代に合わせて、儒教を復興した。けれども墨子に反撥し、教理を洗煉せんれんするに急で、(2)旧来の陷穽かんせいを自覚したうえで、(d)矯正しようとしたようには思えない。その「性善説」はよくまとまった理論ではあるものの、やはりまず自己を重んじる理念が、その前提・中核をなしている。

そこで今度は、儒教の利己・(e)恣意しに歯止めをかける動きが、儒教のなかから生じてきた。それが礼の中庸をモデルとする規範性・強制機能を活用しようとした荀子である。荀子は孟子ほど、人間の自律自浄能力を信用しなかった。いわゆる「性悪説」であり、外からの規範・教育・強制でその悪性を矯ためようとしたわけである。

礼のりはモデル・規範であるので、その点で法のりとあい通ずる。経典・規範の規制力・強制力を刑罰で高めたものが法律・法典であり、ここに重点をおけば、儒家は法家に転化する。荀子の一門から法家の韓非子・李斯りしが出たのも、宜むべなるかな、である。

現実に地位・能力・関係がまったく対等平等な人間など、古今東西、存在しない。また(3)「情けは人のためならず」、まったく自分をかえりみない人間も、やはり現実にはありえない。そうした常識的な現実から出発し即応して、人間関係を円滑ならしめるべく、理念と実践を磨いたのが儒教である。

まずは自分を中心に、外界すべてを上下の関係で整序するというのが、そのコンセプトの基軸をなす。それを目に見えるように表現するパフォーマンスを定式化したのが、礼制であった。だから儒教の観念と行動に、対等平等は存在しにくい。

しかも儒教思想に(f) 顕著なのは、暴力・武力に対する(g) 蔑視であった。これも自己中心の上下関係の円滑化・安定化と関わっている。人間の腕力は人によってまちまち、また同じ人物でも、年齢によって強かったり弱かったりで、とにかくうしろいやすく、わかりにくい。そんな強弱で上下の関係がいちいち変わっては、秩序は永続せず、不安定になってしまう。儒教がもとになって諸子百家が生じ、儒教にいつそう磨きをかけつつも、多様な思想の共存状態になった。春秋時代とはそんな時代であり、社会である。(4) 儒教を生み出した場合は、儒教だけでは用を足せなかったわけである。

国々がひしめき並立している時代、個々人が自由にふるまって実力で競合する社会に、対等平等の観念と作法がなくては都合がわるいし、また力の行使を認めない思想原理では、ものの役に立たない。儒教がそうした時代・社会で、(h) 唯一無二の普遍的な価値基準と行動様式になることは難しかった。逆に平和な秩序が求められる時代・社会には、かえって安定した現実を反映し、表現する上下の整序がふさわしい。

儒教が春秋戦国時代には、必ずしも適合普及せず、一学派にとどまらざるをえなかったのも、皇帝が統一し、秩序を必要とした(5) 漢代、ようやく優勢になって根を下ろしたのも、そうした事情がはたらいている。

(岡本隆司「中国の論理」による)

問3 空欄Aを補うのに最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(配点5点)

- ① 神秘主義を徹底的に否定するのでは、真の合理主義は生まれない。
- ② 神秘主義に裏打ちされた社会では、真の合理主義は育たないものだ。
- ③ 人間社会の現実に即してこそ、徹底した合理主義が生まれるのである。
- ④ 神秘主義の強いところでない、徹底した合理主義は育たないものだ。
- ⑤ 神秘主義を常識で中和してこそ、徹底した合理主義が生まれるのである。



問4 空欄Bを補うのに最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

(配点5点)

- ① 逆説的な現象
- ② 真の合理主義
- ③ 弁証法的展開
- ④ 二元論そのもの
- ⑤ 中庸の思想そのもの



